

問：朴

人間が仏になるための仏舞のプロセスの中に、トランス状態になるような場面はみられるか。

答：遠藤

韓国のシャーマン的な動きのような、厳格な儀式は見られなかった。舞人は体を清めてから仮面をつけ、仏舞をする。その流れとして、踊りの前後に僧侶による声明や御詠歌を詠じる、としか今は言えない。

問：原郁子（お茶の水女子大学・院）

仏舞は上肢の動作が重要であり、仏像や仏の絵との関係を言っていたが、ある仏舞のポーズが特定の信仰する仏像や基になった仏像の典拠はみつけれられるか。

答：遠藤

舞踊動作の中に仏の性格が明確に現れているかは、疑問に思える分析結果であった。仏像や絵画は寺に保存されているわけではなく、いつどこから伝承されたかという記録もはっきりわからない。現在、残っている形として明確な意味を読み取ることはできなかった。

司会者のまとめ

徳丸 吉彦

この分科会でも3人の方に発表してもらいました。

最初の発表は台湾からお見えになった劉さんで、台湾で音楽教育が日本の植民地時代にどのように行なわれていたか、という研究です。これは大変面白いと同時に大変悲しい話でして、植民地化したのだったら日本文化を輸出すればいいじゃないか、というのが私の考えですが、日本人はそういう事をしないで、西洋から受け入れた学校唱歌を、つまり西洋音楽を台湾に持っていった、といういきさつが明らかになりました。これは日本音楽が日本の国内だけではなくて、海外でも実践されている例になります。ですから、例えばブラジルの日系人の方の日本音楽の研究もそうですけれども、ビルマの中で、なぜ日本の軍歌が今でも使われているか。そういう具合に、日本の外での日本音楽の研究に対する貢献になるだろうと思います。

次の小塩さんの発表は、長唄という三味線音楽を例にして、いかに長唄が他の音楽のイメージを利用し、それと同時に他の音楽そのものも利用しているかを考察したものです。別の言い方をすると、長唄というのは他の音楽ジャンルと豊かなネットワークを持っている、ということを明らかにしたものです。これは社会学の理論をご存じの方には、非常に異様に聞こえるかもしれませんが。なぜなら中根千枝さんが『タテ社会の人間関係』というのを書いて、特に英語の版やフランス語の版を作る時に、そこにパフォーマンス・アーツの項目を追加し、日本人のパフォーマンス・アーツはみんなジャンル別にやって、一緒にやらずに相互関係がないということを力説したからです。また、丸山真男さんが『日本の思想』の中で、日本文化というのはみんな蛸壺のように分離していて、ささら型の西洋文化とは違うというモデルを提出しました。これは日本音楽の専門家の間では事実と違うということが明らかなんですが、そのこ

とを長唄を例にして明らかにした、というところがおもしろい点です。

最後の遠藤さんの発表は舞踊です。舞踊の研究というのは、もちろん舞踊の動作の分析をしなければいけません。そこで仏舞といって仏の姿をして踊るもの、あるいは仏を拝む姿勢で踊るという舞踊を例にして、それが他の日本の大多数の民俗舞踊と、いかに動作の形態が違うかということ明らかにしました。しかし今後は、仏教学や民俗学の問題をもっと積極的に取り入れないと、なぜ仏の格好をするのか、なぜ違った動作をするのか、そしてその動作をする為に、どのような身体的技法を使い、どのような心理的なプロセスで踊り手になっていくのか、ということが明らかにならないかもしれません。しかし非常に重要な第一歩であると思います。このように日本学のシンポジウムの中で舞踊と音楽の発表を行うこと自体が、他の領域との関係を深める上で大変に有益であるというのが結論です。